

自然と文化・神事の宿るところ

―播磨国総社に期待するもの

藪田 貫



特別展「お城のできる前の姫路」にて三ツ山謡囃子を披露

お寺や神社には特別な雰囲気があります。山門や五重塔といった建造物のある寺院に比べると、神社は質素で、あたかも自然のなかにあるように思えます。伊勢神宮はその象徴ですが、わたしの住む島本町（大阪府三島郡）の水無瀬神宮にも、その雰囲気漂っています。

後鳥羽上皇（一一八〇～一二三九年）の水無瀬離宮の跡に鎮座する神宮の境内には、名水「水無瀬の水」が湧き出ています。昭和六〇

年（一九八五）、環境庁の「日本の名水」百選に選ばれたもので、最近、その水を頂きに週に一度、夫婦でお参りしています。

「午前六時から午後五時の間に限る」と保存会が申し合わせていますが、土日の午前には一〇人前後の列ができています。順番待ちの後、水をペットボトルに容れて帰るのですが、いつも違和感が残ります。なぜなら大半の人が、水汲みの前後に参拝しないのです。すぐ傍に拝殿があるにもかかわらず

ず。そればかりか往路復路とも、鳥居を潜る時にも礼をしないのです。神域に入って名水を頂きながら、どうして神の恵みを、ありがたく思わないのか…

一般に神社は、「願いごと」を賽銭と交換で「頼み」にいくところと考えれば、願わなくても水は湧き出ているのでタダで汲めばいい、となるのでしょうか。もしそうなら神社には、「願いごと」がなくとも、「ありがたい！」と思わせる力が備わっていることを理解すべきでしょう。緑豊かな社叢はその一つですが、もっとも重要な力は、一年を通して行われる神事ではないでしょうか。それは多くの場合、地域の氏子たちが一様

に感じていることで、播磨国総社も例外ではありません。神事には、「ありがたさ」の源泉が宿っています。

近年、一時、中絶していた神事・祭礼を復興する機運が、全国的に目立っているように見受けられますが、とても喜ばしいことです。播磨国総社も謡囃子を復興され、昨春秋当館の特別展「お城のできる前の姫路」でもご披露いただきました。総社の氏子でないわたしは、館長という仕事を通してしか播磨国総社を知りえないのですが、行く度にまず、美しく手入れされた境内に癒されます。さらに霜月大祭や新春祈願祭の厳かな神事には、なんととも言えない魅力を感じます。

くわえて昨年秋、雅楽が演じられ、一つの発見をしました。長生殿を開け放って演奏された雅楽の音色を聞きながら、日本が長く伝えてきた文化遺産が、すぐ身近にあることを知ったのです。神社の「ありがたさ」にまた一つ、気付いたのです。

新緑の光る静かな境内とともに、豊かな神事と祭礼を通して日本の文化を豊かにしてほしい―わたしが播磨国総社に抱く期待です。



やぶ た 貫
藪田 貫

兵庫県立歴史博物館館長
関西大学名誉教授

